

京町家通信

KYOMACHIYA PRESS
vol.103

京町家通信 第103号 2015年11月1日発行
特定非営利活動法人 京町家再生研究会
一般社団法人 京町家作事組
京町家友の会
京町家情報センター
ホームページ<http://www.kyomachiya.net/>

京町家は今 ● 東南アジアとの町家再生交流に向けて —国際交流基金の支援が始まる—

20年余の活動の中で京町家再生研究会を訪れるアジア諸国の
人々が増えている。研究会からも小島理事長を筆頭にタイや香
港など、伝統建築と歴史都市の保存に取り組む市民団体を応援にも
いつてる。この四半世紀、日本でも町家・町並みや都市の歴史的
景観保護への取り組みが進んだ一方、経済成長著しい東アジア、東
南アジア諸国でも人々の関心が伝統建築、町並み、そして伝統文
化の再生に向かっている。

そこで「町家から創造都市へ」と題し、アジアの伝統文化を創
造する協働作業をはじめようという事業に今年度から国際交流基
金の支援を受けることになった。ここでいう「伝統文化を創造す
る」という言い方に違和感を持たれる方がいるかもしれない。伝
統は守るもの、継承するものという古い考え方があるからである。
しかし、我々京町家ネットの活動は、まず作事組の再生事例の
数々を見れば分るように、伝統を尊重しつつも創造的な再生を続
けてきた。多少の出来不出来はあったとしても、町家がより美し
くなり、住民の創造的な活動が再生できるように創意と工夫を重
ねてきた。これをアジア各地との協働作業にしようと提案し、3
か年の交流事業を始めることになった。

実際、アジアの町家、東南アジアでは「ショップハウス」と呼
ばれるが、その創造的再生事業は拡がり、マレーシアではペナン
とマラッカの町並みが世界文化遺産にも登録されている。その背
景で、タイやインドネシアでも、大工、左官、建具師とともに住
民が建築家とともに暮らしの文化の再生を始めている。

伝統文化の創造的再生は町家に限ったことではない。暮らしを
彩る工芸品の数々がこの京都では今もよく継承され、新たな魅力
を発信している。染織、陶芸など多くの工芸作家と京町家再生に
は深い繋がりがある。

一方、東南アジア諸国には京都でも馴染みのある緋、更紗、絞
染、紋織など染織工芸品や、宋胡録、安南などの陶磁器が多い。
緋はインドネシアのイカットが代表で、タイのマットミー、パリ
島のグリーンシン、スンバ島のヒンギーが知られる。インド起源の
更紗は、タイ更紗、ジャワ更紗として和装にも用いられる。特に、
ジャワ更紗はバティックと呼ぶ蠟結染が有名で、ジャワ島中部の
ジョグジャカルタが名産地、男女の正装に今も用いられる。他に
も巻締めはブランギ、縫締めがトリティックという。紋織（浮
織）とは、文様を浮かせて織る技法で、インドネシアやマレーシ
アには、ソンケット、ポヒクン、ディモール島には縫取織のブナ、
タイやラオスにはキット、ムック、チョックなどがある。

25年以上も昔の話だが、インドネシアの大学教員を吉田孝次
郎氏の無名舎に案内した折、吉田氏の豊富な工芸品コレクション

から緋、ジャワ更紗等を見せていただいた。何百年も前に渡来し
た品々が京町家に伝えられていることにインドネシア人の方が驚
いていた。そして吉田氏が、古都ジョグジャカルタの工房の様子、
生活の中の工芸として親しまれているか、一時間以上も受け答え
が続き、案内と通訳を務めた私にも強い印象が残っている。

一方、東南アジアの陶磁器は中国や朝鮮半島製のもののほど有名
ではないが、南蛮貿易で渡来したものが茶の湯の世界で珍重され
た。宋胡録はタイ北部スコターイ県サワンカローク郡で焼かれた
白地鉄絵の茶碗、安南はベトナムの旧名で染付茶碗や花生け、水
指に用いられる。安南には、11世紀頃の薄手の白磁の皿や鉢が、
また14世紀には白地に植物を描いた繊細な染付、青花蓮池文盤
が、さらに15世紀の五彩がある。中国だけでなく、インドの影
響を受けた中部のチャンパ王国の文化だといわれる。これら古美
術が日本でも尊ばれたのは、当時の国内産地より2～300年ほど
先行していたためといわれ、南蛮物、島物と呼んだ作品は今も京
都をはじめ日本各地に残っている。遠い昔から東南アジアと京都
に人や物の行き来があったこと、その交流が今も我々の伝統の底
流に流れていることを思うと、町家再生の国際交流に期待が高
まってくる。京町家を受継ぐ次世代の人々にぜひ発展させていた
だきたい京町家の文化的意義である。

京都に来る前の7年間、私は国際連合地域開発センター職員と
して「アジア大都市の開発と保全」という支援事業に従事してい
た。その狙いは、グローバル化の中で埋没しがちな各国、各都市
の多様な伝統文化、町並みや工芸技術を活かした社会と経済の発
展を目指す地域文化力を育てる点にあった。そのモデルが日本の
京都だったことは言うまでもない。

この事業で設立した「アジア西太平洋町並み保存ネットワー
ク」の交流事業は今も続き、今回も奈良まちづくりセンターの皆
さんと共に、我々再生研のメンバー4人も2016年1月のバリ島会
議に参加する。我々の遠大な狙いが実現するには、まだ半世紀以
上の年月を要するだろう。京都と京町家が、彼らのモデルと胸を
張って言えるように漸くなりつつある。25年前には吉田さん一
人がその意義を訴えていた。あの時のインドネシアの人々の驚き、
ジャワで身近な染織品が吉田さんの手で広げられた折の喜び表情
が忘れられない。今度は、京町家ネットの皆さんにも東南アジア
の作家たちを迎えてほしい。そして、皆さんで東南アジアの町並
みと工房を訪ねて歩く機会を計画したいと思う。

<宗田好史（再生研副理事長）>

論考◎ 9月例会報告 山鉾設計監理の課題

平成27年夏の祇園祭では、前祭の芦刈山、山伏山、後祭の鯉山、役行者山が山本体の復元新調を終え、巡行初披露となった。これで京町家再生研究会が設計監理を行い新調した昇山は、前年お披露目した占出山を含めて5つとなる。9月12日（土）の再生研例会では、設計監理の担当者がそれぞれの山の特徴や新調の過程を解説した。参加者は11人と少人数であったが、スライド写真をみながら、図面を囲み、かなりつつこんだ議論が展開された。個々の構造など詳細は専門家である担当者の報告を待ちたい。今回は例会を踏まえて、設計監理の意義と課題をまとめておく。

1. 復元新調とは

祇園祭山鉾連合会を通じて、各山の保存会の要請に応じ、京都府及び京都市の文化財保護課が緊急度と予算にあわせて復元新調を計画する。補助金事業となるため、専門家として京町家再生研究会が設計監理を担当し、図面と報告書を作成する。

山本体とは、駆体である櫓をさし、付随する床および胴掛け下地も含めている。巡行ではご神体や縣装品が飾られ、覆い尽くされるので、ほとんど見えない。祇園祭を基礎から支えている部分である。近世から近代にかけて製作された山の部材は保存会の方々や作事方が丁寧に扱われてきたものの、さすがに傷みが激しく、近年ようやく新調工事を迎えた。

計画のめどが立つと前年度から実測調査に入る。実物を調査できるのは一年に一度、お祭の期間、山建ての機会しかない。保存会、作事方ともタイトなスケジュールの中で動いておられるなか、ご協力をお願いしている。

基本的には割れや欠損部分を復元して元の形に戻すが、町家の再生と同じく、お町内の要望や工務店の意見も聞きながら、工夫できるところは改修を加える。構造は町家に比べるとシンプルだが、細かい部材も多く、特にご神体などがのる床の穴の位置、補強のための金物の実測や図面化には案外と手間と時間がかかる。

2. 例会報告

櫓の構造は鉾と大きく変わるものではない。部材の大きさや筋違、貫の入れ方などは各山で異なる。櫓の構造は四方転びが一般的だが、四本柱が直立している山もある。床は当然のことながらご神体や飾りによって穴の開け方もさまざまで、松の位置も必ずしも中心ではない。鉾のように真木がある山もある。これらの受け材の工夫も多様であり、先人の知恵が見受けられる。胴掛け下地の造りもさまざまで、その違いが傷み方に出ているかもしれない。丈夫で長持ちする構造を検討する担当者にとっても得るところが大きく、各担当者同士が議論する場面もあった。

3. 設計監理の役割 検討会と仮組

復元新調において共通しているのは木構造を第一と考え、不具合の調整は他の部材でおこなうということだ。金物も使うが、構造を傷めないように、材が長持ちするように考える。ところが、この一点が保存会の要望と噛み合わないことが多い。しかも保存会が抱えている問題の多くは実はこの点に関連しているようだ。保存会としては町内で受け継いできたご神体や縣装品が最も大切であり、無事巡行を果たすことが最大の目的である。巡行当日、効率的に間違いなく山飾りを進めるために工夫したい。各町内の作事方はその要請に従い、作業効率を優先する。

急場しのぎに部材をはつつたり、部品をとりついたりして本体をいじめてしまうこともある。

このような問題は復元新調の過程において数回開かれる検討会で噴出する。検討会には各保存会、工務店だけではなく、京都府、京都市、連合会の担当者が参加し、実物や図面をみながら復元新調のあり方を確認する。設計や工務店としてはいろいろな提案をするが、基本思想が共有されていないと議論が噛み合わない。これらをすべて調整するのが設計監理として再生研に託されている。

縣装品との兼ね合いは象徴的な問題である。胴掛け下地の中には左右で寸法が違うとか、きちんとした直角部分が一面もないとかいう山もあった。検討会の中では仮組も行い、縣装品を実際につけて議論した。いつもはあわただしく行っているが、時間を掛けてゆっくりやってみるとできることもある。過去の写真を見ながら「謎」が解けたところもある。ある山では大きな下地仮模型を作り、織物商も来て縣装品の寸法を合わせる場面もあった。検討会や仮組は山全体を理解し、関係者が情報を共有できるという点できわめて貴重な機会なのである。

4. 今後の課題

伝統の祭礼と技術をどのように伝えていけばよいのだろう。現代の技術や工夫も必要だが、木造になじまないものは避けなければならない。確かに技術は進んでいるが、新しい素材との兼ね合いは難しい。また効率を第一にすると、ものの扱いがおそろかになる。保存会や作事方でも一年に一度の短い時間で多様なことを伝えるのは難しいだろう。

今後は検討会や仮組のようなワークショップを開催し、関係者とともにじっくり取り組む機会をもちたい。縣装品の新調など、それぞれの専門家はいるが、総合的に検討するためには、設計監理の立場が重要となる。山に飾られた時、巡行時の影響を関係者全員で考える機会が必要であろう。

基本的な考え、すなわち駆体、構造が第一であるという意識を祭に携わるすべての方々に認識していただけるよう、まずは再生研が持っている情報を公開し、関係者と議論する場を設けたいと考えている。



占出山 2014年の山建て

9月例会

祇園祭の昇山新調 ―山鉾設計監理の課題―

平成27年9月12日（土）14時から17時

釜座町町家にて

占出山／木下龍一、役行者山／内田康博、山伏山／末川協、
芦刈山／井澤弘隆、鯉山／三木佑美

＜丹羽 結花（京町家再生研究会）＞

京町家再生の試み ●四条通の御茶屋の復元 —— 祇園南町Im邸

昨年の7月初め、祇園祭の準備に追われている最中、仲良しの大工親方から町家の改修について一緒に相談に乗ってほしいと連絡があった。彼は京都市景観・まちづくりセンターの専門相談員の役を受けており、そこでの相談案件だそうだ。場所は四条通の南側、大和大路と花見小路の間で、内外の観光客で賑やかなところ。前祭の直前にお話をお伺いに行った。

建物は袋路地を持つ1階で間口3間の二連棟、路地奥の4軒の町家とともに明治期の築造であった。元々は御茶屋の建物であった。2階のナカノマが板間で舞台に使われるため、それを前後のお座敷が囲む形のプランであり、四条通りのアーケードの後ろ、2階オモテの後付けの面格子の裏側には御茶屋格子の欄干がそのまま残されていた。祇園で有名な履物屋さんが3代に渡り店子として営業を続けてこられたが、100年ぶりに空き家になった。Im氏は路地を囲む6軒の町家のオーナーであり、四条通に面した店舗やギャラリーの改装も行ってきたが、現代の工法による改修に飽き足らず、景観・まちづくりセンターに相談に出向いたと言う。そこで紹介されたのが我々という訳で、センターの担当者には感謝深く思う。

Im氏は、清水坂のマンションを息子さんに譲って、この町家に住まれるおつもり、そのための水廻り等の改修と、1階オモテの2間をご自身で店舗にすることを望んでおられた。打合せの後、建物の調査と実測を行った。東京炊事にされたハシリの床をめくるとダイドコの下に6畳ほどの大きな地下室があった。戦時中に掘られた防空壕より明らかに古い。Im氏も存在は知らなかった。同じ時期に改修をお手伝いした同じ祇園の花見小路の御茶屋さん（永らくギャラリーとして活用）にも大きな地下室があった。こちらは漬物置場と呼ばれていたもので、よくもまあ、昔の人たちは漬物を食べていたのだと感心したが、大工親方から聞くところによると、蔵のない御茶屋では火事のときに家財を避難させるのに地下室を設けていたそうだ。石積が大黒柱の足元で崩れていたが、ともかく砂漆喰で仕上げられた曲面の壁は年代を経て美しく、ぜひ店舗の一部として活用したいとの結論になった。箱階段も立派に残っていた。

建物の調査では、小黒柱を中心に放射状に建物の沈下が見られ、先の大黒柱の基礎の据直しを含めほぼ全数の柱の上げ前が必要なこと、主屋、水廻りとも屋根が築造時から差し替えのみで修繕が続き、下地も含め葺替え時期であること、排水も路地を含めて土管のままであることが分った。1,2階のハシリの側壁に間中のずれがあり、2階の胴差が持ちこたえられずに重量鉄骨で補強されていた。大壁に改修されており築造時からの構造なのか分らない。先の店舗の改修により、オモテ大黒通りの通し柱が切られてヒトミ梁が抜かれていることも分った。7月末に調査の所見をまとめてお伝えし、建物の存続を目指すならば、構造も含めて全面的な改修が必要であること、予算と工期をお伝えし、建物外観を（ヒ

トミ梁や庇の復旧を含め）元の御茶屋に戻す提案を行った。Im氏にはすべて即時了解を頂き、設計着手を前提で実測の続きを行った。Im氏もお酒が好きで、路地の一軒の1階をバーに改装され洋酒がずらり、時折の夕方の打合せの後はそこで「まあ一杯」から始まることもあった。

設計の期間中もIm氏は精力的に町家やそれを取り巻く伝統構法について学ばれた。打合せの後、食事のお伴を兼ねて、祇園や先斗町を歩いては町家の格子、駒寄、樋のアンコウや金物、一文字瓦の種類や地域差についてお話する機会を頂けた。ご自身で見つけられた改修事例や改修中の他の現場について意見を求められることもあった。花見小路界限は、近年観光客でシーズン関係無しで混み合い、店舗に改装される御茶屋や町家があちこちで見受けられた。外観は綺麗になっても、構造については現代の工法で改修されていることが100%、中には重量鉄鋼で構造を架け替えている例もあった。その中で伝統軸組、伝統構法の復権に拘りながら改修を続けることに理解を持って頂けたかと願う。設計の打合せのたびに建物を訪れると、床に養生用のテープであちこちにマーキングされている。何うと設計図の寸法を現場で原寸に落とし、実際の感覚を確認されていた。時に打合せにみえる奥様も「家で設計図ばかりみてはるんですよ」と。設計冥利に尽きる。

果たして昨年11月には設計完了、工事に向かう運びとなった。店舗とは別に路地の中にも居宅の玄関の設えを、火袋の2階の側壁の下には柱の新設を計画した。解体では屋根の垂木にすべて和釘が使われていたこと、もとの御茶屋にも祇園祭のための幕掛けがあったこと、築造時の四条通が20cm以上今より低かったこと、ハシリの奥の通し柱も切られていることが分った。側壁の1,2階のずれはおそらく築造時からのもの、ただしこの胴差のみ米松が使われており蟻害の跡があった。今年の4月末までが契約工期だったが、別件のずれ込みや、応援大工の急要や、若手大工が交通事故に巻き込まれたり、連休明けの目標が5月末になり、6月の六本木ヒルズへの遠征までが祇園祭本番までになり、実に引き渡しは8月末、だだ遅れの改修となった（追加工事も今までの改修で一番多かったが）。そんな中、ほぼ毎日Im氏は現場を訪れ、大工以外の各職の仕事ぶりも確認され安心されていた。油絵を趣味とされるご自身は各所のベンガラ塗り、四条通の養生用の合板の塗装、2階の格子の洗いなどに加わられた。周辺の商用の町家改修現場では考えられないことだと感謝深く思う。

四条通の顔であった西洞院の町家が取り壊される中、四条通に再びかつての御茶屋の姿が復元された。伝統構法が存続する限り町家の再生産は可能だ。それを信じる大工や職方、設計に信頼頂けた施主に感謝します。

＜末川 協（京町家再生研究会幹事）＞



歳時記 ● 京町家逍遥 第一部 報告（平成27年10月18日開催）

当日は秋の空が高く、お天気に恵まれた一日となりました。アトキンソン邸、釜座町町家、再生研本部の3軒を巡ることとし、多くの方々のご参加がありました。今回はお茶とお琴、それぞれに趣向をこらした逍遥でした。

●アトキンソン邸

友の会会長のデービッド・アトキンソンさんは皆様ご承知のように超多忙。それにもかかわらずお心尽くしのお席をご準備下さいました。たくさんの方々がこられる「おおよせ」はあまりなさらないということでしたが、それぞれの席ともなごやかな場となりました。

床の間には二条城ゆかりの後水尾天皇のお軸がかり、アトキンソンさんの二条城へのお気持ちが感じられました。お道具もそれぞれ大切なものをお出しいただき、とても楽しい「目のお正月」でした。

普段はお忙しく、なかなかご縁の無いお宅ですが、家具調度にいたるまで、アトキンソンさんの美意識の高さを感じるお席でした。



●釜座町町家

釜座町茶道部のメンバーによるお席、ここはいつもびっくりの趣向があります。今回はギターの演奏が流れる中でのお茶席。それも生演奏です。亭主は建築家、ゆえにお手の物（？）の床の間改変で、ギターの演奏ボックスが出来上がっていました。

お稽古ではギターの音が気になって、お手前が・・・といった声も聞こえてきたのですが、当日ははてさて。お席に入られた方々からはとてもとても楽しかったと目に涙を溜めながら笑いながらの感想をたくさん頂きました。

茶道部のメンバーはお茶会を重ねるごとにそのお手前も充実しています。お揃いの作務衣で次はどのようなお席をしつらえてくださるのか、今から楽しみにしています。



●小島家（再生研本部）

午後に一弦琴きさらぎ会の秋山博子さん、大西裕子さんの演奏がありました。素朴な音色に乗せて、「秋の七種」「漁火」など情緒豊かな歌が、玄関から座敷まで開け放ちた空間に流れました。演奏後は参加者が一弦琴を囲んで、質問が相次ぎ、次回は楽器や演奏についてもお話しただけの機会を設けたいと思います。

＜京町家友の会事務局＞

報 告 ● 例会報告 秦家見学会・市川邸改修現場見学会

● 秦家

8月30日の昼下がり、祇園祭太子山のお町内にある秦さんのお宅をたずねました。秦家は太子山奇応丸というお菓を製造販売されていたお宅で、表には立派な看板があります。中にはいると大きな置き看板が店の間で迎えてくれます。柱にもお菓の看板が掛けてあり、往年の京都のお菓屋さんの様子が感じられます。表屋造りと呼ばれる町家ですが、秦家はお菓屋さん、商うもので家の形が少しずつ違うということもよくわかります。玄関からお座敷に通していただいて座ると、夏座敷の涼しげなしつらえに日盛りを歩いてきた暑さのなごりもすーっとひくように感じました。お手入れの良く行き届いたお座敷からお庭をながめ、お茶とお菓子をいただきました。

ひといきついたところで、秦めぐみさんのお話をうかがいました。めぐみさんのお話は、庭にくる鳥たちや、お花のこと、家とのつきあい方など、多岐にわたりますが、それがすべて町家とのかかわりであり、日々の暮らし方だということがよくわかります。町家で暮らすということが普通のことでありながら、その普通のことがとても貴重なことになり、その大切さをあらためて実感できた訪問でした。

秦家のまわりもビルがたくさん立ち並び、お庭からの景色はずいぶんと変わってしまいましたが、市中の山居、町家の存在感がまた際立ったという一日でした。

● 市川家 （市川屋珈琲）

9月19日シルバーウィークといわれる大型連休でにぎわう東山の界限から少し入ったところにある町家の改修現場を見学しました。河井寛次郎記念館のすぐそばで、築150年を経た町家が珈琲と器のお店に改修されます。元は陶芸家さんのお宅、広い通り庭があり見上げるとたつぷりとした大きな火袋（吹き抜け）が見えます。窯は清水焼団地に移動されたそうで、この広い通り庭の奥にはご自慢の焙煎器が据わるとききました。1階はすべてお店、奥にはお庭があり、表からはお客さんの様子を見ながら、お庭が見えるのだらうと思います。カウンターとテーブル席が出来るとききましたが、そのテーブル、大きなテーブルにするか、小さなテーブルをいくつか置くか、まだ検討中と市川さんご夫妻はお話になっていらっしゃいました。さてどちらになるのでしょうか。

10月にはいつから、床のたたきをみんなでされたようです。その出来具合も興味津々です。多くの方々が訪れるとたたきの落ち着きもはやくなるかもしれませんね。たくさん行きましょう。

角を曲がって数分で河井寛次郎記念館、界限は清水焼の町です。町家といえば西陣や中京、下京の家を思い浮かべますが、窯や作業場のあった陶芸の家も個性的です。その家がどんなふうに珈琲のお店に生まれ変わるのか、11月11日の開店を楽しみにしています。



「市川邸現場見学会」の様子

市川屋珈琲 2015年 11月11日に開店します。
是非、お立ち寄りください。
(京都市東山区渋谷通東大路西入鐘鋳町394)

<小島富佐江（京町家友の会）>

改修事例◎京町家再考×京町家net

上京区／中務町の町家

設計：クカニア／施工：大下工務店

千本丸太町に程近い連棟長屋の一棟。表の低い厨子二階型のたたずまいが、ところどころではあるが通りに軒を揃えている。

今回の改修事例は、住み手をまだ見ぬ建物。棟札は出ていなかったが、明治25年の納税を示す書類が見つかっており、ざっと120年以上を経た町家である。以前はご老人がお住まいだったようだが、2-3年の空き家期間を経て、改修工事を終えたのちに住み手を探すことになる。

依頼主は自社でも多数の改修を手掛けておられた不動産会社の八清さん。町家利活用の風潮が進む昨今、京都の文化的資産としての京町家をもう一度見つめなおし、伝統技術や文化的背景、暮らしの作法を内包する”本当の京町家”を次世代へと継承する改修をしようと、作事組を通じて計画が始まった。

建物は間口2間半・奥行6間に水廻りの離れをもつ一列三室の間取りで、室内は単板等で大壁に覆われているものの、大きな改変はされておらずハシリニワも土間のままであった。改修を進めるにあたっては、この町家本来の姿を活かしながら、新たに入る住まい手が生活に馴染めるようにと思案した。

煤で黒くなった壁の残る火袋や、ミセノマや玄関の大和天井はそのままに。片側半分だけアルミサッシ窓に改修されていた虫籠窓は、改めて地を作って復元し、庭の敷石やミセノマの建具などは、場所を移して再利用した。2階の二室が独立して利用できるように、階段を押入からハシリニワに掛け替え、離れの水廻りは、現代設備を入れて刷新。離れまでのアクセスを重視して、ハシリニワは上げ床に改修した。

構造改修にあたっては、販売者としての責任を果たそうとする施主と、伝統的な町家の保全や再生を担う作事組との隔たりも表面化した。意見交換を行いながら方針を決定した。施主からの要望に従い、柱のすべり幅を広げるために礎石の周りにコンクリートを打設する一方、足固めの設置に対して

は、伝統軸組を重視する作事組の考え方を町家構造から紐解き説明し、大方の理解を得た。また、多数の施工者と付き合い不動産会社として、技の標準化のために定めている施工方針に対しては、施工を担当した大下工務店の技術を信用して任せて頂いた。

余談ではあるが、立場の違いによる意見の相違も、突きつめれば世間一般や行政の動向によるところも大きく、結局は私たちの考え方が住み手をはじめ広く一般に受け入れられる土壌が必要であると感じた。作事組の改修方針を世間に投げかけながら、理解を広めることが一層必要であると思う。

着工後、解体をすすめると合板で覆われていたトオリニワの側壁に、ほぼ土がついていないことが判明。貫を補修して竹小舞を編み直し、土をつけ直して修繕した。小舞掻きや荒壁塗の際には、一般の方々を対象にした参加型ワークショップを開催し、京町家の構造や成り立ちを体験してもらう機会を設けることができた。残念ながら連棟であるため、揚げ前は隣棟に影響を及ぼさない範囲にとどめたが、根腐れしていた柱の足元は根継ぎしなおし、井戸引きも入れ替えた。床の下地にも杉板を使用し、ゲンカンは三和土仕上を採用した。

ともすればスピードや見た目を重視しがちな売買物件において、町家本来の姿に向き合った作事組の技を発揮できた事例となったと思う。この町家がどのような住まい手を見つけ、そののちどのように過ごしてゆくのか、改修に関わってきた私自身も大変興味深く楽しみである。

最後になりましたが、意見交換や調整を含め、この機会を設けてくれた担当者をはじめとする八清の方々、改修方針や協働体制についてアドバイス頂いた作事組理事の方々、普段と違うルールに戸惑いながらも全力で現場を納めてくれた工務店のみなさんに感謝し、お礼申し上げます。

＜南麻衣子（京町家作事組理事）＞



作事組の職人さん その30 ● 畳・襖・建具（株式会社マツモト）

昨年作事組に入会された株式会社マツモトの松本照明さん（39歳）にお話を伺いました。

●来歴について

祖父の代から畳業をはじめ、家族経営で畳業を続けながら、父の代で建具やリフォーム業にも手を広げるようになりました。伏見桃山城の影響なのか、畳店が密集する地域に会社がありますが、時代の流れで伏見の畳組合はここ10～15年のあいだに組合員の数が半分になり、40代が3人ばかりで後を継ぐのは少なくなってきたという状況です。畳だけでやっていくのは厳しい時代ですね。

私は高校を卒業後1～2年父のもとで修業し、20歳の時、アラキ工務店に入社しました。アラキ工務店で8～9年、大工見習いから大工となり、二級建築士を取得させていただきました。アラキ工務店につとめていた時には作事組の町家の現場も経験しました。それから実家に戻り、今に至ります。実家では畳や襖・建具の製造や修繕をしたり、ご近所さまや知人の紹介でリフォームの仕事もしています。

●畳のよさ

床はフローリングが増え、畳の需要は減っていますので、材料としてもっとほかの形で使えないだろうか、たとえば天井や腰壁に用いてはどうかとあれこれ考えたりしますが、畳はいまのかたちで完成されつくしていてアレンジしにくいですね。

フローリングの場合、床に敷居がつきささっているので張替えようと思うと建具にも影響しますが、畳だと取めるだけですからメンテナンスや取り替えがしやすいです。畳は丈夫で床としての機能性も十分で1950～60年代ごろの急ごしらえの家など、床材はベニヤが貼ってあるだけのことがあり、床板がぼろぼろになっていて畳でなんとかもっているようなところもあります。

●畳の手入れ

夏は雑巾をかたくしぼって拭きます。冬は乾燥しますのでうるおいを与えてやるといいです。いい畳は黄金色に光ります。品質の劣るものは枯れた草も入っていて茶色です。おじいさんの時代には、さらの匂いを届けるといって拭くことをせずそのまま届けていました。いまはしっかり拭いてきれいな状態でお届けします。

●強み

設計から墨付け、全体に携わり、元請と下請けの両方の立場を経験していることでしょうか。下職として建具も畳もやりますので他の業者とぶつかることなく、建具の建てあわせ後に畳を入れることができます。ただときに日本建築の決まりごとが現場で失われていると感じることがあります。たとえば障子と襖の溝の違いを区別せずに敷居や鴨居ができている場合。それは現場の下請けが口を出してはいけないことで、違うとわかっていて障子の溝に襖を入れることもあります。そうすると隙間風が入りやすいですね。他の立場が見えすぎるのも考えもので、思うところがあっても何でも言っていわけではなく、そのときの自分の立場をわきまえてはいけない部分があります。

●仕事のやりがい

無垢材はノミやカンナを使って手直しできますからやりやすいです。シート貼りラッピングではできません。この仕事のやりがいは、ものづくりの楽しみにあると思っています。大きいものができあがっていく喜びというのでしょうか。今後も昔からのお得意先を大事にしながら、幅広く技術を身につけて一軒の家をつくる醍醐味を味わえるような仕事をしたいと思っています。



会社メモ：株式会社マツモト

京都市伏見区銀座町2丁目326-5

聞き手：森珠恵（作事組事務局）

interview — 京町家に移り住んで ● 岩本邸

今回は、上京区にあるお宅。近所には山中油さんなどが
あり、町家もまだまだ多く残る地域。ある路地の中の町家
にお住いで、今でも住みながらちょこちょここと自分で手直
しをしながら暮らしを楽しまれているようです。お話をお
聞きしてきました。

聞き手：京町家情報センター 城幸央

1、この町家に住むことになったいきさつは？

私は建築専門学校の卒業生なのですが、在学中に学校に
この町家の大家さんが改修の相談に来られ、それから学校
の学生たちで改修作業を始めたのが始まりです。最初は、
別の2人の学生が改修しながら住んでいたのですが、彼ら
が卒業してこの町家が空いてしまうことになり、ちょうど
一人暮らしを始めようと考えていた私が引き継ぎ住むこと
になりました。

2、土壁も自分で塗ったそうですね。

構造改修については、建築専門学校の先生が監理され学
生のメンバーで傷んだ部材の入れ替えやあげまいなどはや
りました。私が住み始めてからは、新たに土壁を自分で塗
り直したり、解体するところから貰ってきた建具を調整し
て入れたりしました。

今では、この家をいじっている経験、大工さんや左官屋
さんの手伝いを仕事でやっている経験から、個人的に左官

工事の相談を受けることもあり、友人の家や店舗のちょっ
とした改修やゲストハウスにする改修のお手伝いをしてい
ます。

3、実際の住み心地はどうですか？

私が住み始めて3年ほどが経ちましたが、その間には3
人が入れ替わりでシェアしていたこともありましたが。エア
コンはないので、やっぱり夏は暑いですし、冬は寒いです。
近所の方が、寒いだろうとホットカーペットをくれたり、
家にあるタンスやソファ・テーブルなどの家具も友人な
どから貰ったものですし、だんだんと快適な暮らしになっ
てきています。今はシャワーしかないですが、しっかりと
疲れを取りたい時には近所の銭湯に通って温まっています。

4、ご近所との関わりはいかがですか？

普段の町の役は参加できていないですが、地蔵盆には毎
年呼んでいただいて参加しています。朝から準備を皆さん
でやってワイワイと楽しんでいます。やっぱりこの町内も
若者は少なく重宝していただいているようです。毎年、地
蔵盆の時に撮る町内の皆さんとの集合写真が楽しみの一つ
でもあります。また、近所のおじさんと顔を合わせた時
には、いつも近所をうろついている野良猫の話をするので
すが、その不思議な関係も何だか心地よいものだなと思
います。



●事務局覚え書き

11月29日（日）には毎年恒例「住みたい町家を探しに行こう・
2015秋」を開催します。これは、契約可能な賃貸・売買の京町家
物件を皆さんで巡るものです。歩いて回ることで、その町家があ
る地域の雰囲気を感じとることも、物件を選ぶ際には大切なこと
だと思います。お時間があられる方はぜひご参加下さい。詳細は
京町家情報センターHPにてお知らせしておりますのでご確認ください。

オーナー登録数：延212

ユーザー登録数：延1370

物件登録数：延1463

成約件数：延190 (2015年10月10日現在)